

社会人基礎力を指標としたプレゼンテーション教育のデザイン

— コミュニケーションとマネジメントの並行反復学習 —

正員 中野 美香^{*a)}

The Design of Presentation Education Based on Basic Skills — Parallel-Repeated Learning of Communication and Management —

Mika Nakano^{*a)}, Member

(2012 年 2 月 13 日受付, 2012 年 6 月 22 日再受付)

This paper describes the method of presentation education to foster practical communication skills of the students as career support and the test the effects. The education started as new courses for communication skills in the Electrical Engineering majors Fukuoka Institute of Technology in 2007. To maximize the effect of the presentation education regardless of students' motivations and abilities, the elements which needs to be included in the subject can be summarized as follows: (A) "knowledge phase" to acquire knowledge on the theme, (B) "presentation phase" to acquire skills of creating materials and oral presentation, (C) "management phase" to acquire management skills necessary for complete tasks. The program was designed for students to learn (B) and (C) in parallel in the domain of (A) based on Basic Skills as a criteria of self-evaluation, which repeats twice in one semester. The results indicate that the time when the students notice their problem and improvement differs in the items of Basic Skills. One time practice is not enough to reflect themselves and change their behavior in presentation education.

キーワード: 社会人基礎力, コミュニケーション, プレゼンテーション, マネジメント, キャリア支援

Keywords: basic skills, communication, presentation, management, career support

1. はじめに

21 世紀は知識基盤社会 (knowledge-based society) の到来を迎え, 高等教育の改革が進んでいる。中央教育審議会⁽¹⁾ではこのような社会を「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」と定義した。知識の進展はパラダイムの転換を伴うことが多く, 従来の詰め込み教育を脱却し新しい学力観の下, 幅広い知識と柔軟な思考力を育成する教育が求められている。

2011 年に実施された経団連の調査⁽²⁾によると, 採用選考時に重視する要素はコミュニケーション能力が 8 年連続一位で, ここ数年は企業の「買い手市場」の傾向にある。このような状況から就職活動におけるコミュニケーション能力の重要性は社会的に認知されつつあり, 就職を意識して大学生活で自己研鑽に励む学生は多い。コミュニケーション

ン能力が指し示すものは多岐にわたるが, 仕事においては他者と協同で期限付きの課題に取り組む状況に必要な能力が主な対象となる。経済産業省は「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として, 「行動にうつす力」「考える力」「共に働く力」から構成される社会人基礎力を提唱した。この社会人基礎力を基礎学力や専門知識と関連させ, 総合的に向上させる様々な取り組み⁽³⁾が大学で行われている。

福岡工業大学電気工学科では 2007 年度入学生よりコミュニケーション教育を導入した⁽⁴⁾。2012 年度より就業力育成 GP の下, この取り組みを土台にした講義が全学展開され, 縦横の他の専門科目との連携に焦点化している。筆者が本学科の教育にたずさわった約 5 年間を振り返ると, 近年の入学生は就業意識が高く, コミュニケーション教育も当然必要なものとして認識している学生が増えているように感じられる。プレゼンテーションの講義においても学生のニーズを把握し, 他の独創的な取り組み⁽⁵⁾⁽⁶⁾に学びながら効果測定を繰り返すことで, 一定のレベルを確保できるようになってきた⁽⁷⁾。一方, プレゼンテーションをはじめとするコミュニケーション関連科目は体験型で学習内容が可視化さ

a) Correspondence to: Mika Nakano. E-mail: nakano@fit.ac.jp

* 福岡工業大学工学部電気工学科
〒811-0295 福岡市東区和白東 3-30-1
Dept. of Electrical Eng., Fukuoka Institute of Technology
3-30-1, Wajirohigashi, Higashi-ku, Fukuoka 811-0295, Japan

れにくく、他者と協同で課題に取り組むことや、学習内容を他の文脈と自主的に関連づけて理解することに関しては個人差が大きい⁽⁸⁾。多様な知識領域で応用可能なプレゼンテーション能力を伸ばすために、課題遂行に関するマネジメントの学習と、自分の学習状況や行動を振り返る内省の機会が不可欠である。

そこで本研究では以下の三要素に基づく学習目標および教授アプローチのデザインをおこなった：(A)「知識の獲得」、(B)「プレゼンテーションに必要な資料作成・発表技術の獲得」、(C)「課題遂行に必要なマネジメント能力の獲得」。講義では(A)領域において(B)と(C)を並行して学習し、それを15回の講義中に2回反復する学習構造を構築した。異なる(A)領域で(B)と(C)の学習を2セット体験することで、(A)が変わっても知識領域固有の状況や文脈に対応可能な(B)と(C)の応用力を培うことができる。(A)～(C)の活動での体験を省察し、目標設定により思考・行動の改善をおこなうために、先の社会人基礎力を振り返りの指標に用いることとした。

上記に述べた(A)～(C)の枠組みはプレゼンテーション科目にとどまらず卒業研究や学業全般にも影響を及ぼす重要な要素であり、早期から構造的に学習することは有益だと考えられる。本研究はプレゼンテーション教育における新しい教育手法を導入し、講義を通じた学生の社会人基礎力および講義・就職活動に対する自己評価の変化から効果を明らかにすることを目的とした。

2. 講義の構成

〈2・1〉 (A)「題材に関する知識の獲得」 プレゼンテーションの講義は2年前期に開講される。講義の目標は、「グループでの実習を通して、基礎的なプレゼンテーション能力を育成すること」とした。段階的にプレゼンテーションを学習するために、学生は半期15回の授業で2つのテーマについてプレゼンテーションをおこなう。前半の目的は「スライド作成法の基礎を学習する。独自のテーマを設定し、グループで調査し、発表の手順について一通り理解する」で、後半の目的は「効果的に聴衆に伝えるためのプレゼンテーションの実践的な技法を学ぶ」である。シラバスを以下に示す。

知識の範疇を規定するテーマは、学生のキャリアの中核となる電気工学科の専門科目に関連したものと就職活動に関連したものを選び、調査を通して各分野の知識を増やすことをねらいとした。テーマは、第1回目が「クリーンエネルギー」、第二回目が「企業研究」である。各グループはこのテーマの範囲で希望するトピックを選び、情報収集してプレゼンテーションをおこなう。トピックの例を挙げると、「クリーンエネルギー」では太陽光発電や風力発電に関するものなどがあつた。「企業研究」では、電気機器メーカーや鉄道関連のものなどがあつた。シラバスでは、第1回から第7回までが前半のプレゼンテーション、第8回から第14回までを後半のプレゼンテーションとし、最後の第15

回を反省学習とした。

1. スライド作成法の基礎 (1) 【第1回課題】
2. スライド作成法の基礎 (2)
3. スライド作成実習 (1)
4. スライド作成実習 (2)
5. スライド作成実習 (3)
6. スライドの相互評価 (1)
7. スライドの相互評価 (2)
8. プレゼンテーションの技法 (1) 【第2回課題】
9. プレゼンテーションの技法 (2)
10. プレゼンテーションの技法 (3)
11. プレゼンテーションの技法 (4)
12. プレゼンテーションの技法 (5)
13. プレゼンテーションの相互評価 (1)
14. プレゼンテーションの相互評価 (2)
15. 反省学習

〈2・2〉 (B)「プレゼンテーションに必要な資料作成・発表技術の獲得」 7回分の講義で1セットとなる本番のプレゼンテーションまでの一連の作業をまとめると、以下の11段階に分けられる (Table 1)。はじめは、グループをつくり (段階1)、グループで相談しながらテーマを決定し (段階2)、それに沿って発表概要 (段階3) や構成案 (段階4) をまとめる。全体の枠組みができたところで、情報収集をおこないながら (段階5) スライドを作成する (段階6)。その過程で、教員やTAからのコメントを基にグループで意見交換をしながら、スライドを修正する (段階7)。発表の一週間前にはプレ発表をおこない (段階8)、時間内に発表が終わるかどうかわ、伝わりにくい箇所がないかどうかを確認する。最後に本番の発表をおこない (段階9)、聴衆からの質問にわかりやすく答える (段階10)。発表しない場合は、質問を考え質問する (段階10)。すべての発表が終わったところで、発表者以外はコメントを書き、発表者は聴衆からの評価シートに書かれたコメントを基に反省と自己評価をおこなう (段階11)。プレゼンテーションの作業としては、段階1から段階8までが「発表の準備段階」で、段階9から段階11までが「発表段階」となる。よりよいプレゼンテーションの発表をおこなうためには準備段階の作業の充実が不可欠なことを講義中に教示した。

Table 1 に示した内容は特に親しくない人と上手に協力しながら何かをつくりあげる作業に共通する要素が含まれている。一人でプレゼンテーションをおこなう場合はプレゼンテーション技術の習得が主たる目的になるが、この講義のように他者とプレゼンテーションをつくりあげるためには、個人の考える力や行動する力に加えて、他者と協同する力や議論をまとめる力など、総合的なコミュニケーション能力が必要となる。議論をまとめる力については1年次科目で学習しているが、プレゼンテーションをつくりあげるプロセスは1年次の学習環境と比較すると自由度が高く実際の仕事の場面に近い状況であつた。そのためグループでの課題遂行能力を同時に育成させる必要が生じた。

Table 1. The working process for presentation.

Process	Contents	class
1. Group setting	Students are divided into several group of two or three by lot.	1
2. Theme	Students discuss and decide the theme of the presentation.	
3. Draft	Students write a draft about the background, objectives and the reason to choose the theme.	
4. Organization	Students organize the framework of the presentation in a paper.	2
5. Research	Students research about the theme and gather data and information.	
6. Slide	Students make slides for presentation using PowerPoint.	3
7. Modification	Students modify their slides by accepting comments from a teacher and TA.	4
8. Rehearsal	Students rehearse their presentation in front of a teacher and TA.	5
9. Presentation	Students make a presentation in front of all the audience in the class.	6-7
10. QA	Presenters answer the questions which audience asks after presentation.	
11. Self-evaluation	Presenters self-evaluate after presentation. Non-presenters write some comments.	

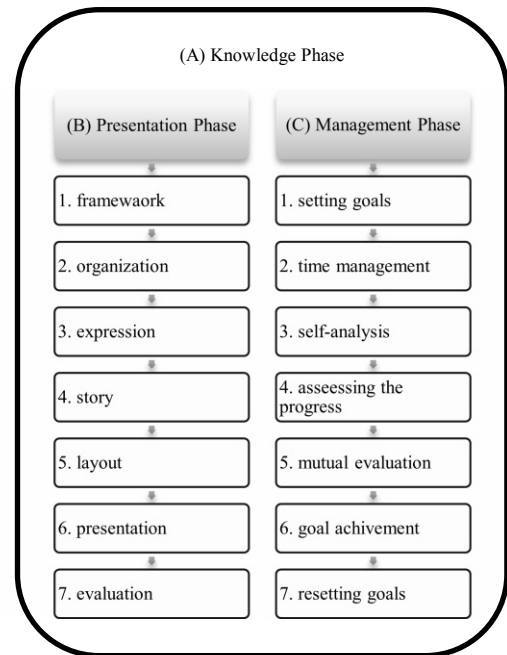


Fig. 1. Three elements for presentation education.

〈2・3〉 (C)「課題遂行に必要なマネジメント能力の獲得」

プレゼンテーション学習を効率よく進めるためには、学習者個人が課題をどのように管理し遂行するかに関する基本的なマネジメントを学習する必要がある。大学の講義でプレゼンテーションができたとしても、準備段階からいくつかの制約を考慮してプレゼンテーションの課題を遂行するマネジメント能力が身に付いていなければ実生活では応用がきかない。プレゼンテーションは大学生が社会人として必要なスキルを体験を通して学習できる貴重な機会ととらえることができる。そこで上部構造にあたるプレゼンテーションを学習しながら下部構造のマネジメントについて同時進行で並行に学び、実践を通してそれぞれの理解を相互に深められるような構成にした。

マネジメントについては、1つのプレゼンテーションを創り上げるまでに必要なステップを Fig. 1 のとおり 7 つに分け、学習内容を連動させて学習できるようにした。目標設定では、講義やプレゼンテーションに対する目標を決める。タイムマネジメントは、締め切りまでに作業をどのようにおこなうか作業プロセスを確認する。自己分析では、課題の向き合い方について自分のスキルや態度を分析し、強みは伸ばし弱いところは改善するようにする。進捗状況のチェックでは、中間段階で課題の仕上がり具合やグループの作業の仕方等を振り返り、問題点を共有して、残りの時間で効率よく作業が進められるようにする。相互評価ではグループ内で課題や個人の発表態度について評価し合い、プレゼンテーションの完成度を高める。目標達成では、実際にプレゼンテーションの本番をおこなった後、個人レベルやグループレベルで目標が達成できたかどうか、できなかったとしたら何が不足していたのか分析する。最後に、一連のプレゼンテーションの作業を通して考えたことを参考

に目標を再設定する。

〈2・4〉 A-C の学習を統合する振り返りシート

プレゼンテーションもマネジメントも 1 回の学習ではそこから学ぶことに限界がある。実践を通して得られた反省に対してもう一度同じような機会が与えられ、そこで過去の反省を生かすことで確かな学びが得られると考える。そこで講義では Fig. 1 に示した A-C の学習 1 セットを半期 15 回の講義で 2 回反復する構造とした。講義では 2 セット繰り返した後、15 回目の講義で全体の総括をおこなう。その際 1 セット終了時、2 セット終了時に各セットを振り返る機会を設け、最終的に 15 回目講義で 2 回のセットを含む講義全体を振り返るようにした。

毎回の講義ではプレゼンテーションの実技とマネジメントの知識を統合するために、社会人基礎力を指標にその日の講義の自分の言動を振り返り、次の講義でどのように活かすかについて Fig. 2 のシートを作成し記入してもらった。シートは 6 つの質問で構成され、「過去と自分」「自分の現在」「現在と将来」の視点から多面的に振り返りができるようになっている。問 1「現在直面している課題」、問 2「次の講義までに作業すること」、問 3「社会人基礎力と関連付けた講義での言動の振り返り」、問 4「これまでのグループへの貢献度」、問 5「今後どのようにグループに貢献するか」、問 6「講義の感想」。

問 1 と問 2 は現実的な課題で、その日の講義と次の講義を関連付けて考えさせた。問 3 はその日の言動を社会人基礎力の指標に沿って評価させた。問 4～5 は身近なグループの仲間との付き合い方や作業の仕方について振り返りをさせた。これに加えて、第 1 回講義、第 7 回講義、第 15 回講義で社会人基礎力の指標を用いて 5 段階評価させ、自分が特に伸ばしたい項目とその理由を書かせた。以上の振り返り

学籍番号 _____ 氏名 _____
問1 現段階の課題 (内容、発表、その他)
問2 次回までに作業すること
問3 社会人基礎力と関連させて今日の自分の態度や行動を評価しなさい。
前に踏み出す力 (主体性・働きかけ力・実行力)
考え抜く力 (課題発見力・計画力・創造力)
チームで働く力 (発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力)
問4 これまでの授業を振り返り、グループへの貢献度を自己評価しなさい。
問5 本番の発表に向けてどのようにグループに貢献するか書きなさい。
問6 授業の感想

Fig. 2. Reflection sheet for presentation.

返りにより、知識、プレゼンテーション技術、マネジメント能力の3つに関わる講義内容と自分自身をつなぐことはもちろんのこと、講義と講義が連続ドラマのようにつながり、科目間ひいてはキャリアと自分のつながりから学習が統合されるようにした。

3. 方 法

〈3・1〉 対 象 2011年度前期に福岡工業大学工学部電気工学科のプレゼンテーションの講義を受講する2年生93名(男子学生91名、女子学生2名)のうち、筆者が担当するクラス1組26名(男子学生24名、女子学生2名)、2組22名(すべて男子学生)を対象とした。

〈3・2〉 手 続 き 質問紙調査は3種類実施した。一つは社会人基礎力である。質問紙は講義中3回、回答してもらった。調査日は第一回講義(4月6日)、1回目のプレゼンテーションが終了した第7回講義(6月1日)、2回目のプレゼンテーションが終了した15回講義(7月20日)である。以下それぞれ1期から3期と示す。質問紙の問1は12項目から構成される社会人基礎力の5段階による自己評価である：①主体性、②働きかけ力、③実行力、④課題発見力、⑤計画力、⑥創造力、⑦発信力、⑧傾聴力、⑨柔軟性、⑩状況把握力、⑪規律性、⑫ストレスコントロール力。この12項目は①から③が「行動にうつす力」(アクション)、④から⑥が「考える力」(シンキング)、⑦から⑫が「共に働く力」(チームワーク)の上位カテゴリーに分類される。問2は「自分がのびたい項目」と「その理由」を問う自由記述である。講義中に質問紙を配布し、10分程度で回答

してもらった。

二つ目は講義に対する認識の変化を明らかにするための調査である。15回講義で、「プレゼンテーションの授業に対する態度の変化」について5段階で第15回講義での現在の認識と第1回講義での過去の認識を質問した。本論で分析した質問項目は、「プレゼンテーションは得意だ」「プレゼンテーションをするのが好きだ」「プレゼンテーションはきちんと習えば誰でもできる」の3つである。回答時間は約5分だった。

三つ目は、講義と就職活動の意識に関する質問である。15回講義で以下3つについて5段階評価で回答してもらった：「授業を受けられて良かった」「就職活動をうまく乗り切れる気がする」「社会人になって仕事をするのが楽しみ」。回答時間は約5分だった。

4. 結果と考察

〈4・1〉 社会人基礎力の平均得点の変化 プレゼンテーションを通じて社会人基礎力に対する自己評価がどのように変化したか結果を述べる。統計結果の信頼性を高めるため、社会人基礎力の上位カテゴリー3分類(「アクション」「シンキング」「チームワーク」)を用いた。質問項目と時期による構造の変化を明らかにするために、平均点を従属変数とする反復測定による2要因分散分析を行った。第一の要因は時期(1期、2期、3期)、第二の要因は項目(アクション、シンキング、チームワーク)である。分散分析の結果、時期、項目の主効果($p < .001$, $p < .001$)が示された。時期の組み合わせは、1期と2期は有意ではなかったが、1期と3期および2期と3期の組み合わせは有意であった。

この結果より、時期によって平均点が異なることが明らかになった。平均点の推移から各項目について以下のような特徴がある。アクションは、1期と2期の差はあまりないが3期で大きく向上している。シンキングについては、段階的に徐々に上がっている。チームワークについては、アクションと同様に1期と2期の差はあまりないが段階的に上がっている。以上より、アクションとチームワークの傾向は近似しており、シンキングの傾向とは異なることがわかる。シンキングにあたる④課題発見力、⑤計画力、⑥創造力は個人の思考スキルを中心としていることから、構造化された課題によって段階的に育まれるのではないかと考えられる。一方で、アクションの①主体性、②働きかけ力、③実行力と、チームワークの⑦発信力、⑧傾聴力、⑨柔軟性、⑩状況把握力、⑪規律性、⑫ストレスコントロール力は、他者とのコミュニケーションの中で具体的な課題が浮き彫りになる。そのため、1回のプレゼンテーションでは課題の確認にとどまり、2回目のプレゼンテーションを通して行動を変えた結果、自己評価が高まったことが示唆される。特にアクションとチームワークを向上させるためには、本論で提案した並行反復構造のような、課題を2回与えて、1回目の課題の反省を踏まえて2回目の言動を改善させられるような学習環境づくりが重要と言える。

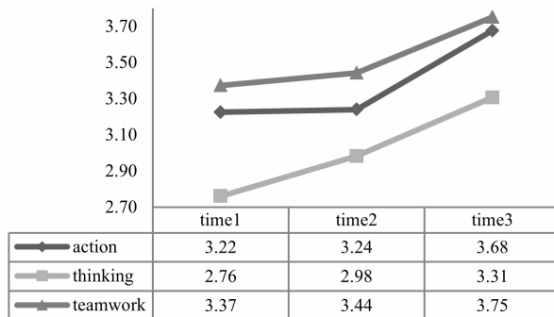


Fig. 3. Change of the three elements of Basic Skills.

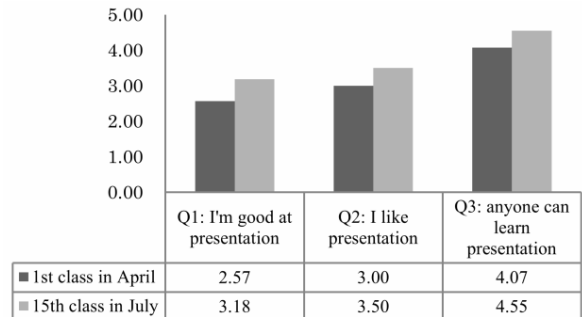


Fig. 4. How students think about presentation.

〈4・2〉 伸ばしたい社会人基礎力と理由 社会人基礎力の点数と合わせて「どの社会人基礎力を伸ばしたいか」と「その理由」をたずねた回答の結果を示す。括弧内の数字は人数である。伸ばしたい項目について第1回目でも多かったのは⑦発信力(12), ⑤計画力(10), ⑥創造力(10), ③実行力(9)であった。第2回目は, ⑦発信力(13), ③実行力(11), ①主体性(10)であった。第3回目は, ③実行力(8), ⑤計画力(8), ⑦発信力(7)であった。結果全体を見ると, 1回目と2回目は⑦発信力が1位であったが, 3回目では③実行力と⑤計画力が1位だった。

次に「伸ばしたい理由」に関する代表的な記述を調査時期に分けて示す。括弧内はその伸ばしたい項目である。

1 期

- 自分は他人に伝える事が苦手なので。(発信力)
- 普段から周りの人に何言ってるかわからないといわれるから。(発信力)
- 計画力を伸ばせば効率よく行動できると思うから。(計画力)
- 目標のために行動できる人になりたい。(実行力)

2 期

- 第一回プレゼンテーションで, 他の人の気持ち, 考えを理解することの大切さを思い知った。まずは, しっかり聴くことから始めたい。(傾聴力)
- 自分の言いたいことを理解してもらえないのが一番悲しいから。(発信力)
- 自分では課題が見つからず, 完璧だと思ってしまうが, 実はたくさん問題があることがあるから。(課題発見力)

3 期

- 物事に進んで取り組めば, 物事は上手くいく場合が多いから。(主体性)
- 自分は結構めんどくさがりなので, 実行に移すまでが時間がかかるので, 実行力を伸ばせたらもっとよい自分になれると思ったから。(実行力)
- 計画をする習慣がついていないと何をやるにしてもうまくいかないと思うから。(計画力)

上記の記述は一部を取り上げたが, 全体的に時期的な特徴が見られた。1回目は日頃から苦手意識のある項目を伸ばしたいという記述が多いが, なぜ苦手なのかについて具体

的な根拠が挙げられていない。2回目では, 1回目のグループ作業を行って実際に自分に不足していた点を踏まえてこの項目を伸ばしたいという記述が増えた。3回目では, 2回のグループ作業を終えてまだ自分に不足していて, 今後必要になる点が理由として挙げられている。時期による回答の比較より, 1期では自己評価に合理性が見られないが, 2期では現実的な課題を踏まえた部分的・局所的な自己理解が育まれている。そして3期では2セットの反省を通じて自分の中の普遍的な原理・原則を見出していた。以上より, 並行反復学習によって自己と他者や, 過去・現在・未来の学習行動についての総合的な理解が育まれていることがうかがえる。

〈4・3〉 講義と就職に対する認識

講義を受けてプレゼンテーションに対する認識がどのように変わったかを調べた。各項目の平均点を Fig. 4 に示す。問1「プレゼンテーションは得意だ」は事前 2.57 ($SD = .90$), 事後 3.18 ($SD = .97$), 問2「プレゼンテーションをするのが好きだ」は事前 3.00 ($SD = 1.06$), 事後 3.50 ($SD = 1.11$), 問3「プレゼンテーションはきちんと習えば誰でもできる」は事前 4.07 ($SD = .62$), 事後 4.55 ($SD = .63$) であった。質問項目と時期による構造の変化を明らかにするために, 平均点を従属変数とする反復測定による2要因分散分析を行った。第一の要因は時期(1期, 2期), 第二の要因は項目(得意, 好き, 学習可能性)である。分散分析の結果, 時期, 項目の主効果 ($p < .001$, $p < .001$) が示された。時期および項目においてすべての組み合わせが有意であった。講義前後の平均点の差を見ると, 3項目のうち問3が0.61と最も大きかった。この結果から, 2回のプレゼンテーションを通して, 学生の認識が好意的・意欲的に変化することがわかる。学生のプレゼンテーションに対する苦手意識が根強くとも, 学習の見通しを立て, 足場作りをおこない, 講義での学びを段階的に積み重ねていく環境を整えれば, 自分でも誰でもできるという認識に変化させることができると言える。

最後に, 講義と就職活動についての質問の結果を示す。「授業を受けられて良かった」は 4.58 ($SD = .54$), 「就職活動をうまく乗り切れる気がする」は 3.81 ($SD = .79$), 「社会人になって仕事するのが楽しみ」は 3.72 ($SD = .80$) であった。講義に対する満足度は高いことから, ただプレゼンテーションを実践するだけでなく, プレゼンテーションを通し

てマネジメント能力を身に付け、社会人基礎力を軸に自分の成長に気付くことの有効性が示されたと言えるだろう。また、就職活動に対しては前向きな回答結果になっており、面接に対しても今の能力で十分とは言えないが、努力次第で乗り切ることができるのではないかと考えている学生が多いことがうかがえる。

5. おわりに

本研究では、(A)知識領域において(B)プレゼンテーションと(C)マネジメントを並行して反復学習する学習目標および教授アプローチのデザインをおこなった。学生が講義を通じて自分の成長に気付けるように、社会人基礎力を指標とし、振り返りシートによって学習内容の理解を促進する仕組みにした。その結果、受講者の社会人基礎力の自己評価は向上し、講義や就職活動に対しても好意的な認識に変化したことから、認識レベルでは本提案の有効性が示されたと言えるだろう。一方で、本研究ではマネジメント能力そのものは測定していない。今後は社会人基礎力についても客観的評価を加え、(A)～(C)における他者から成長を見守られ評価されることの効果について検討を要する。また他科目や卒業研究との連携方法についても研究を積み重ねていきたい。

謝 辞

本研究には福岡工業大学の宮本知加子先生、研究室の菅原絵梨氏、田山地広樹氏、藤井洸一朗氏にご協力いただきました。上記の方々をはじめ電気工学科の教員や学生など多くの皆様に心よりお礼申し上げます。本研究の一部は、平成21～22年度福岡工業大学エレクトロニクス研究所の補助を受けて行われました。

文 献

- (1) Chuo Kyoiku Shingikai : Waga kuni no koutoukyouiku no shourazou (toshin) (2005) (in Japanese)
中央教育審議会：我が国の高等教育の将来像（答申）(2005)
- (2) Nippon Keidanren : "Questionnaire result about the graduate recruitment in 2011", <http://www.keidanren.or.jp/policy/2011/091.html> (2011) (in Japanese)
(社)日本経済団体連合会：「2010年度・新卒者採用に関するアンケート調査集計結果の概要」, <http://www.keidanren.or.jp/policy/2011/091.html> (2011)

- (3) K. Kawaguchi, S. Hirobayashi, M. Ishii, Y. Hirasawa, T. Ohji, and A. Saiki : "Bringing-up of Basic Skills for Member of Society by the Combination of Theory and Practice and Construction of Visible Evaluation System", *J. JSEE*, Vol.57, No.5, pp.5_84-5_90 (2009) (in Japanese)
川口清司・廣林茂樹・石井雅博・平澤良男・大路貴久・佐伯 淳：「理論と実践の融合による社会人基礎力育成と目に見える評価システムの構築」, *工学教育*, Vol.57, No.5, pp.5_84-5_90 (2009)
- (4) M. Nakanao, K. Takahara, and T. Kajiware : "Instructional design to develop communication ability for students in the electrical engineering majors", *IEEJ Trans. FM*, Vol.129, No.5, pp.379-385 (2009-5) (in Japanese)
中野美香・高原健爾・梶原寿了：「理系学生のコミュニケーション能力の育成を目的とした教育設計」, *電学論A*, Vol.129, No.5, pp.379-385 (2009-5)
- (5) K. Yamaguchi, S. Ohtsuka, S. Morita, I. Matsumoto, M. Yakabe, Y. Hayamizu, and K. Ohtsuka : "An Attempt to Improve Students' Presentation Skills via Course of Graduation Research and its Educational Effects", *J. JSEE*, Vol.55, No.1, pp.1_41-1_46 (2007) (in Japanese)
山口頼司・大塚 茂・森田慎一・松本 至・矢壁正樹・早水庸隆・大塚宏一：「卒業研究指導の一環として実施したプレゼンテーションスキル教育の試みとその教育効果」, *工学教育*, Vol.55, No.1, pp.1_41-1_46 (2007)
- (6) H. Suzuki and H. Kato : "Proposal of a Training Method for Presentation Focuses on Social Networking Activities", *J. Multimedia Aided Education Res.*, Vol.5, No.2, pp.137-144 (2008) (in Japanese)
鈴木栄幸・加藤 浩：「社会的ネットワーキングに着目したプレゼンテーション教育手法「マンガ表現法」の提案」, *科学教育研究*, Vol.5, No.2, pp.137-144 (2008)
- (7) M. Nakano, K. Takahara, and T. Kajiware : "The change of students' recognition and attitude through "Basic Presentation Skills" in the first semester of sophomore year", *The Papers of Technical Meeting on Frontiers in Education*, IEE Japan, FIE-09-24, pp.37-42 (2009) (in Japanese)
中野美香・高原健爾・梶原寿了：「2年次前期科目「プレゼンテーション基礎」を通じた学生の認識と態度の変化」, *電気学会教育フロンティア研資*, FIE-09-24, pp.37-42 (2009)
- (8) C. Miyamoto and M. Nakano : "How we support uncommunicative students : A counseling method in presentation education", *The Papers of Technical Meeting on Frontiers in Education*, IEE Japan, FIE-10-033, pp.47-52 (2010) (in Japanese)
宮本知加子・中野美香：「コミュニケーションに消極的な学生をどう支援するかープレゼンテーション教育におけるカウンセリング技法ー」, *電気学会教育フロンティア研資*, FIE-10-033, pp.47-52 (2010)

中 野 美 香



(正員) 1979年5月19日生。2006年3月九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化専攻博士後期課程修了。2009年4月より福岡工業大学工学部電気工学科助教。博士（比較社会文化）。2006年日本コミュニケーション学会論文賞、2007年日本認知科学会奨励論文賞受賞。日本教育心理学会、国際議論学会会員。